彬県大仏寺石窟　・法門寺・世界八代目奇跡兵馬俑　・青龍寺（日本密宗発祥地）・陝西省歴史博物館・大雁塔（大慈恩寺、中国法相宗発祥地）・大興善寺（中国密宗発祥地）**・大薦福寺**（だいせんふくじ）**・臥龍寺**（がりょうじ）

- 西安は主な産業は観光・農業・電気産業　歯車企業国営１万人以上の社員　806 万人都市

彬県大仏寺石窟

彬県大仏寺石窟は山を掘り大きな洞穴の中に釈迦像再度に阿弥陀様全体が 50m ほどの壁に掘り込んだ1千体の仏像　。彬県大仏寺は、もとは慶寿寺と呼ばれ、最初は唐貞観２年（紀元 628 年）に建てられたのである。寺院は県政府の所在地から西 10 キロの経河の南岸にある。大仏寺に、北に向いて座った姿の唐代一の大仏があって、その名を得たのである。大仏窟の中の大仏は釈迦牟尼で、高さは 24 メートルに及んでおり、その造形は自然の趣があります、ご尊顔は荘重である。大仏寺の石窟は、中国唐代の始頃の精巧で美しい石刻の芸術と造形の風格を示している。千仏堂（1030 仏像）である。唐の太宗貞観２年（６２８年）建立の彬県を代表する寺院。岩を彫った大仏像、石刻の芸術と造形の風格を示している。唐代初期の精巧かつ美しい石刻は一見の価値あり、陝西省一大きい大仏。唐の太宗李世民の命により、隋末の戦乱で亡くなった将兵を弔うため、山の断面に造営された石窟寺院である。130 に及ぶ石窟　446 の龕（ずし）に 1988 体の代償の仏像が彫られている。その造形はふくよかで丸みを帯び自然の趣があり、顔は荘重である。一説には、太宗の顔を映しているともいわれている。大仏寺の石窟は、中国唐代の始めの頃の精巧で美しい石刻の芸術と造形の風格を示している。 千仏洞には、首のない石仏がたくさん見られた。中国の石仏や文化遺産で破壊の被害を受けているのは、たいていイスラム教によるものか文化大革命のいずれかであるが、ここではそのいずれでもなく、唐代に会昌の難（廃仏政策）に遭遇したためである。当時この政策で、全国のおおきな寺が取り壊された。この付近の戦いで数万の犠牲をお互い出して収拾しました。この霊を祀る為大仏を彫り応福寺を造営した。全体は田舎、山の壁面に掘り込んだ仏像の山、寺の全体は跡で創られたと思う。

立派な山門

彬県大仏寺石窟何故山全体が寺

彬県大仏寺本堂

彬県大仏寺石窟から見た全景　洞窟の中には 24 メートルある大きな、太宗の顔を映したと言われる釈迦牟尼

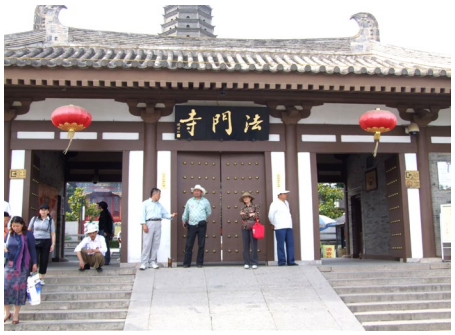
下から見る大仏

大仏の左右には如来

三屈法で彫られたＳ字型の千仏

法門寺

北周以前には阿育王寺と呼ばれ、その塔は阿育王塔と呼ばれていた。アショカ王は古代インドの国王で釈迦牟天が入寂した 200 年後、（前 272－前 226）仏の骨（舎利）を八萬八千四百に分骨して世界各地に塔を建て供養したと伝えられている。**中国では 19 基の仏真身舎利塔**が建立された。法門寺塔はその中で第五基といわれている。北周の武帝の廃仏によって、当寺もまた廃毀された。隋朝が興ると、文帝は仏教を尊崇し、当寺も再建されたが、北魏時代の結構を回復することはできず、また寺の名は成実道場と改められた。その後、隣接する宝昌寺に編入された。武徳元年（618 年）には、寺を宝昌寺から独立させ、寺の名を法門寺と改めた。貞観 5 年（631 年）に、張亮によって塔が修復され、顕慶 5 年（660 年）には、高宗が宝塔内の仏舎利を東都洛陽の宮中に迎えて法要を行なった。併せて塔の修復も行なった。これは、その仏舎利を 30 年に 1 度だけ開函し、供養したならば多大な功徳が得られ、国家安泰を得るという伝承を受けたものである。ただ、この事業を推進した立役者は武則天（ぶそくてん）（中国史上唯一の女帝）であると考えられている。その後、武則天の子である中宗は、阿育王塔に対して、真身宝塔の名を奉っている。また、中宗の皇后で「武韋の禍」で知られる韋后らは、髪をおろして塔に施入している。景龍 4 年（710 年）には、寺名を聖朝無憂王寺と、塔名を大聖真身宝塔と改めている。元和 14 年（819 年）には、憲宗が仏舎利を長安に迎えることを計画し、それに対して韓愈が「論仏骨表」を上提して、その非を訴えた。が、受け入れられず、仏舎利は盛大な法会と共に長安に迎えられ、韓愈は広東省に左遷された。開成 3 年（838 年）には、寺名を法雲寺と改めたが、短期間で法門寺に復している。会昌の廃仏の時には、法門寺も被害を受けたが、懿宗代に盛大な法会と共に仏舎利を長安に奉迎し、法門寺を盛大に修復した。1956 年 8 月には、第一批重点文物保護単位として認定されたが、文化大革命時期に、紅衛兵によって諸堂や諸像が破壊された。時の住職であった**良卿法師**は、宝塔や伽藍を守ろうとして真身宝塔前で焼身を図り、その他の僧侶らも殺戮され、寺は「扶風県無産階級造反派臨時総指揮部」となつた。1981 年大雨で法門寺の塔が半壊したため、1987 年から基礎部分を含めた修理が始まった。すると、地下に唐代に造られた石室「地宮」が見つかった。　地下宮殿から出土された四つの仏舎利の指は、目下のところ、世界で考古科学の発掘と文献や碑文を通じて釈迦牟尼の本物の仏舎利であると実証されており、現時点で仏教界の最高の聖物である。一方専門家の分析によると、地下宮殿の中で発見された四つの仏陀の指骨、その中で本物の仏陀の指骨は一つだけで、その他の三つは本物の仏舎利を保護するために模造された「影の骨」であるという見解もある。どうあれ世界でわずかに残されている貴重な発見であることは確かだ。　1100 年をへてこの世によみがえった品々は、唐朝文化の優雅さや唐代社会の繁栄がしのばれる第一級の工芸品で、幻のやきもの「秘色青磁（ひそくせいじ）」、我が国遣唐使も将来したと考えられる喫茶道具、金銀の舎利容器など、法門寺出土の秘宝が陳列されていた。何故か大規模に観光化された寺　地下１階へ入っていく、舎利が納められていたと思う１５㎡位洞窟が見られる、釈迦の指のお骨、偽者の物が転じされている。見事な観光用に創られた場所、本堂の両サイドには左に鼓楼、右に鐘楼　又、新堂建設には２千万元の費用を費やした観光用の膨大な面積の本堂中国ならでの観光ビジネス、本当の仏教とは何でしょう。



法門寺山門

右に鐘楼

左に鼓楼

13 階の舎利塔

半地下入り口に仏陀の指の模擬舎利の看板

仏舎利が収められていた洞窟

半地下の内部は見事な舎利塔

壁全体に釈迦像

日本での五輪塔同じ 凡字

内部は大勢の観光客

秘色青磁の八稜浄水瓶

金メッキの香嚢

２千万元費の近代的観光用の新築法門寺

境内も広すぎます

内の左右には大きな日光菩薩

月光菩薩

内部は近代的な立派な建物

何故か内部に布袋様と奥に釈迦像

近代的建物には釈迦像

金色の韋駄天

壁全体が釈迦像

壁の釈迦像は1つとして同じものはない

新館の山門には梵鐘

大きな太鼓

世界八代目奇跡兵馬俑 「20 世紀最大の発見」といわれる兵馬俑は、1974 年に農夫が井戸掘りの作業中、偶然見つけました。秦の始皇帝（紀元前 246～210）の陵墓より東へ 1.5km に位置し、約 2200 年前始皇帝を永遠に守るために副葬されたものです。 秦始皇(紀元前 259 年―前 210 年)は中国を統一した最初の封建皇帝である。彼の陵墓は、西安市臨潼区の東 6 キロメトールに位置する。1974 年にこの土地の農民が井戸を掘っていて偶然に発見した。秦の始皇帝が死後の自分を守るために等身大の兵馬を作らせたもので、当時の秦の軍団がそのままの形で再現されている。1974 年に最初の兵馬俑坑が発見されており以來、現在までもう三つの俑坑が確認されており、それぞれに 1、2、3 番号を編成した。三つの俑坑の中に実物の人、馬と等身大の陶俑や陶馬が合わせて約 8000 体がある。その中に戦車兵、騎兵や歩兵などの兵種があり、整然と隊列を組んで、あたかも巨大な地下始皇陵を守護する軍団のように見られる。1 号館から 3 号館までに約 8,000 体の兵馬の

俑（人間が殉死する代わりに埋められた人形）がある。兵馬俑は表情も一体一体で全て異なり、武器を手にしたものもいる。また秦銅車馬展覧館もある。2000年前の清の公定の霊魂を守った戦闘隊1号館は大きなドーム大分壊されていた・2号館は発掘が終わりつつある・3号館は今後発掘がすすみつつある、自然に埋まった。

1 号館膨大な面積発掘現場

8000 体以上の兵士や馬の俑が出土

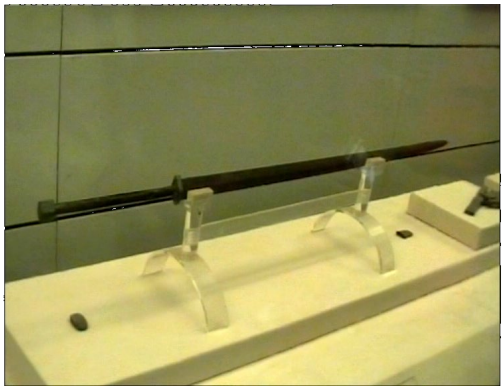
兵や馬の表情や衣装は皆異なっています

現在も発掘中三号館

弓矢の部隊ひざ射ち兵士俑

軍俑

戦の最前線で弓を構える兵士


見事な剣

発掘中

青龍寺（日本密宗発祥地）慧果・空海のゆかりの寺

創建は、隋の開皇 2 年（582 年）であり、当初は霊感寺と呼ばれた。初唐の武徳 4 年（621 年）に一度、廃寺となったが、龍朔 2 年（662 年）に再建され、観音寺と改められた。青龍寺と改称されたのは、景雲 2 年（711 年）のことである。唐中期には、恵果らの密教僧らが住持するようになり、入唐留学僧たちとの関係が生まれた。空海は恵果に学び、天台宗の円仁や円珍らも恵果の法系に連なる法全に就いて密教を学んだ。会昌 5 年（845 年）、会昌の廃仏によって再び廃毀された。しかし、大中 6 年（852 年）には、いったん復興を果たし、護国寺と改められている。ただ、唐末五代の動乱によって、都の長安は急速に寂びれてしまった。そのため、以後三たび姿を消すこととなった。1982 年以来、西安人民政府が、青龍寺の遺址と伝承されてきた石仏寺周辺の発掘調査を行い、多数の唐代の遺物を発掘し、この地がいにしえの青龍寺であったことを確かめた。青龍寺は復興され、そこには空海記念碑、恵果・空海記念堂が建つ。また、元四国霊場会、会長蓮生善隆（善通寺法主）により四国八十八箇所の零番札所と名付けられた。

空海大師縁の青龍寺（日本密宗発祥地）空海堂は隣に本堂が在る、僧恵果は７６６年からこの寺に入山恵果は　空海の師青龍寺は唐代の長安城新昌坊の東南隅にありました。隋の文帝の開皇二年（５８２年）にこの

地に霊感寺が建立されたのに始まります。霊感寺はその後、戦乱のため廃絶しましたが、唐の高宗の竜塑二年（６６２年）になって、城陽公主が観音寺として復興しました。更に、唐の睿宗の景雲二年（７１１年）に青龍寺と称するようになりました。この寺は高台にあります。昔は初唐の政治の中心地であった大明宮とこの寺を結ぶ直線の大通りがありました。唐の名僧恵果は７６６年からこの寺に入山しました。この前、彼は大興善寺で長安に居たインドの名僧不空の直弟子として、密教を深く学びました。恵果は青龍寺で住職になり、真言大教を創立した僧です。彼はこの寺でそれを日本や中国の僧に伝授しました。従って、この寺は日本とも深い関係を持っています。唐の徳宗貞元二十年（８０４年）に第十六回の遣唐使に随行した弘法大師空海がここに止まって、東塔院にいた恵果阿闍梨から真言密教を学んで帰国したことは広く知られています。彼は長安で三年間、真言密教を中心に、儒教、道教、医学、音楽及び料理などの知識を勉強して身につけて８０６年に帰国の途につきました。帰国後、空海は高野山に金剛峰寺を建立して真言宗を確立しました。また、漢字の草書体を利用してひらがなを作ったとも言われ、日本の歴史で弘法大師は三筆と尊称されています。唐の高宗顕慶三年（６５８年）から唐の宣宗大中三年（８４９年）までの間に日本から１９回遣唐使が長安に派遣されています。長安で仏法と諸文化を学んだ著名な（入唐八家）の中の六家、即ち空海、円仁、円行、円珍、恵運、宗睿は青龍寺に入って密教を修行しました。空海に因縁ある四国四県と日本の真言宗の門徒衆は、中国仏教協会及び西安市政府の協力の下に、１９８２年２月、青龍寺遺跡に空海記念碑が建立されました。高さ９．５ｍの大理石造りの記念碑は三層になっていて、正面には空海記念碑の五文字が金文字で刻まれ、東側には空海の経歴が、西側には記念碑建立の異議が、北側には記念碑建設の経過がそれぞれ刻まれています。記念碑のそばに四つの大きな円形の石燈があります。これは四国四県を象徴しています。記念碑の真正面に回廊に挟まれている展示室があり、空海とその関係文献などが展示されている。また、西安市の提唱により、日本の空海崇拝者の協賛を得て、１９８４年に青龍寺東塔院遺跡に恵果・空海記念堂が再建されました。堂の中には空海と恵果の説法像が並べられています。この記念堂は大雁塔の西側の石門の横木に線彫されている唐代の殿堂図と寺院の本堂の構造を参考にして建立されたものです。そのため、唐代の寺院建築の風格に富んでいます。工事中に古青竜寺の門址、塔址、殿堂の遺跡から出土した唐の蓮花模様の煉瓦、瓦當、鴟尾破片、鍍金小仏像、石刻仏像、唐三彩の皿・碗などがその中に展示されている。（日本密宗発祥地）　空海大師縁の青龍寺（日本密宗発祥地）　　青龍寺専門のガイド付く、中国としては小さな寺。四国八十八所巡りの出発点　（弘法筆を選ばずで）　琥珀が安く売っていた、７万円。　４５分間の見学　空海堂は隣に本堂が在る、僧恵果は７６６年からこの寺に入山恵果は　空海の師。

紀元前７０００年頃西アジアで栽培化され始めた小麦はシルクロードを通って中国へ伝わり、麺として中国の黄河流域からアジアの各地へ、そして空海(弘法大師)が唐からうどんの製法を持ち帰り、貧しい地元の民を救った、事から現在の讃岐うどんがあると言っても過言ではない。

恵果･空海の記念堂

大きな立派な山号額

空海記念碑

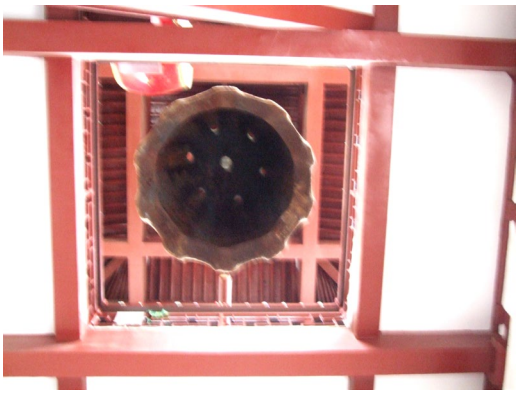
恵果の石画

空海の石画

恵可・空海紀念堂御内陣

左に鼓楼

右に鐘楼



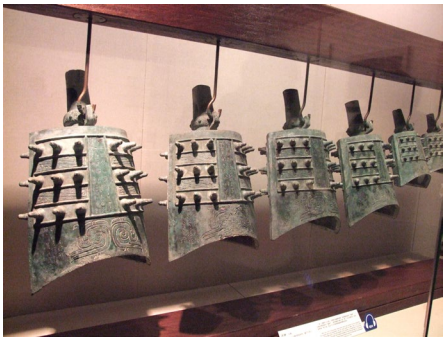
鐘突き堂の鐘

恵果・空海紀念堂記

中日友好源遠流長の石碑

五輪

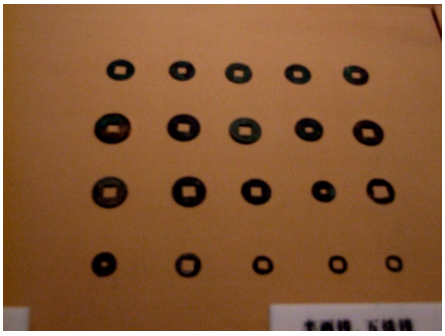
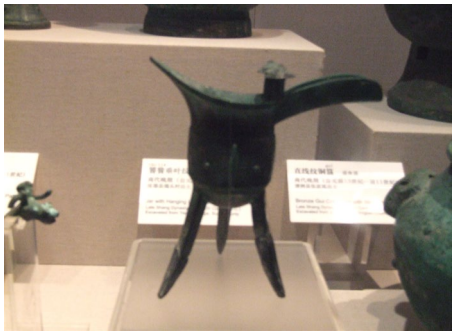
陝西省歴史博物館（１３時より１５時）陝西省歴史博物館は 1991 年に会館。陝西省で発掘された。周・秦・漢・唐の時代を中心とした先史時代から清代までの青銅器や工芸品など約37万点を所蔵している施設です。順路どおりにまわると時代順にみることができる、とてもわかりやすいレイアウトとなっています。展示品は、3000 点以上ありますが、レプリカではなく、本物であり、全て特級品です



楽器

日己方尊（盛酒器）（紀元前 10 年中～前 9 世紀中）

蓋の開かない不思議なとっくり

コイン

大雁塔（大慈恩寺（だいじおんじ）**、中国法相宗発祥地）**　、中国陝西省の古都、西安市南東郊外約 4km にある仏教寺院であり、三蔵法師玄奘ゆかりの寺として知られている。隋の大興城にあった無漏寺（一説に浄覚寺）の故地に、648 年（貞観 22 年）、皇太子の李治が、亡母（文徳皇后）追善のために建立したのが、大慈恩寺である。その規模は、子院（塔頭）10 数院を擁し、建築物は総数 1,897 間、公度僧だけで 300 名という大寺であった。帰朝した玄奘は、本寺の上座となり、寺地北西の翻経院で仏典の漢訳事業に従事した。当寺での、玄奘の訳経活動は、658 年（顕慶 3 年）までの 11 年に及び、合わせて 40 部余の経典が漢訳された。玄奘の弟子である基（窺基）は、師から相承した法相宗を宣教し、「慈恩大師」と呼ばれた。652 年に唐の高僧玄奘三蔵がインドから持ち帰った経典や仏像などを保存するために、高宗に申し出て建立した塔。高さは 7 層 64m で現在は、西安市の東南郊外にある大慈恩寺の境内に建っている。当初は 5 層だったが、途中で

10 層まで増築された後、長安年間（701 年 - 705 年）に現在の 7 層に落ち着くという変遷を経ている。その後、熙寧年間 1068 年 - 1077 年頃に火事に罹災しており、1550 年頃に重修されており、人民中国成立後にも修築されている。名前は、菩薩の化身として雁の群れから地上に落ちて死んだ 1 羽を、塔を建てて埋葬したことに由来。唐時代に進士試験の合格者がここで名を記したことから、「雁塔題名」の成語も生まれた。第 1 層には、仏菩薩の線刻画や、「大唐三蔵聖教序」（褚遂良書（ちょ すいりょう書））及び、高宗撰の序記の 2 石碑が見られる。寺中には、王維や呉道元らの絵画も収蔵されている。**大雁塔は中国仏教史の上でも重要な所で、中国仏教の中心的な所といってもよく、またシルクロードの出発点でもある。**玄奘三蔵がインドから持ち帰った経典は、現在は博物館に有るがほとんど悪くなっているとのこと。中国文化大革命時に前官庁が一人で寺を守ったとの事。　海部元総理の写真が有った。

立派な山号額

山門

広い境内

玄宗三蔵舎利塔

大きな香炉

左に鼓楼

右に鐘楼

経典が納められた塔

塔の 1 階に展示された吊鐘

塔１階展示物釈迦像

塔１階展示物玄宗三蔵画象

玄宗三蔵画象　旅の姿経典が１杯

舎利塔最上階天井

屋上より見た西安市外

前住職が書かれた石碑

大興善寺（だいこうぜんじ）**（中国密宗発祥地）**「大興」は、開皇２年（582 年）の大興城造営と同時に詔勅によって定められた大興殿、大興門、大興県、大興園などの施設と同様、都城名に由来している。「善」の字は、その坊名から一字拝借したものである。大きな寺空海の銅像が有った。中国の陝西省西安市にある寺。隋の文帝が仏教復興の象徴、または国寺として建立した寺である。北周末の大象元年（579 年）に仏教復興に伴って陟岵寺に置かれた菩薩僧 120 名が、580 年には正式の得度を受け、大興善寺が建立されると、移されて住僧とされた。この措置を見るだけでも、対仏教・道教の立場こそ違え、武帝の通道観・通道観学士と、宣帝の陟岵寺・菩薩僧、文帝の大興善寺・元菩薩僧の三者は、立場や名称こそ異なるけれども、統治者側の意向による国家的色彩の濃厚な施設と人員であったことを伺い知ることができる。また、闍那崛多・那連提耶舎・達磨般若・毘尼多流支らの西域からの渡来僧や、浄影寺の慧遠や曇遷・霊裕らの高僧名僧、60 名余も集められ、訳経事業が行なわれた。こちらは、初唐の西明寺や大慈恩寺を舞台として行なわれた玄奘らの大規模な訳経を彷彿とさせるものである。1600 年の歴史を持つ寺院である。716～720 年、インドの僧侶善無畏、金智剛、 不空らがここで密宗経典を翻訳し、密教を伝授したこと により、中国密教の発祥地とされている。寺院の敷地は広く、唐代や宋代に造られた仏像をはじめ、彫刻芸術品、仏教建築の遺跡などが数多く残されている。現在重要文化財に指定されている。大興善寺の創建は、晋の時代から西安でももっとも古い仏教寺院の１つ。中国仏教に於ける密教の発祥地である。敷地内には山門、天王殿、大雄宝殿、地蔵菩薩、鼓楼、鐘楼、転輪古経殿遺跡、観音殿、方丈殿などが建っている。隋・唐時代、長安で仏教が盛んになった際、インドから長安に布教に訪れた僧や海外から来た留学僧などは、ここで経典の翻訳や密教を教え伝えた。大興善寺は長安でも大規模な仏教経典の翻訳地。**円仁や円珍の訪問の碑や弘法大師空海の金像と日本の有名な僧侶の修行の地。隋の文帝が国の中心寺院として、西暦 582 年に建立した大寺。唐の玄宗の代に不空が入り、密教の中心道場として復興した。日本の円仁・円珍もここで学んでいる**

立派な山門

大きな大雄寶殿

立派な山号額

天王殿

大興善寺全景

素朴な舎利塔

左右に　鼓楼、鐘楼

マニ車

天王殿には釈迦像

釈迦三尊像

象に跨った観音像

獅子に跨った文殊菩薩

金の弘法大師空海像　　**鉄之从の作**　　**密蔵宗風**

（松崎鉄之介さんと言う俳人）　　中国仏教協会の主席趙朴初の題字

大薦福寺（だいせんふくじ）内に**（小雁塔）あり** 684 年（文明元年）、高宗の追善のために武則天が建立した大献福寺がその始まりである。そこは隋代には煬帝の晋王時代の邸宅があった故地であった。690 年（天授元年）に現在の寺名に改められた。その規模は開化坊の南半分を占め、小雁塔のある南隣の安仁坊にも及んでいた。公度僧は 200 名を擁していたという。706 年（神龍 2 年）、翻経院が設置され、景龍中には小雁塔が建立された。（小雁塔の項を参照）。翻経院では義浄三蔵が仏典の漢訳に当たり、合計 20 部の経典を当院にて翻訳している。708 年（景龍 2 年）には、観音菩薩の化身として尊崇されていた泗州大聖僧伽が、中宗によって当寺に迎えられた。712 年（先天元年）には、華厳宗の第 3 祖である法蔵が当寺で没している。当寺は華厳宗との関係が深く、雲花寺と共に長安における華厳教学の聖地とされ、小雁塔は華厳塔とも呼ばれた。玄宗朝には、密教を中国に伝えた金剛智三蔵が 730 年（開元 18 年）から 741 年（開元 29 年）の約 8 年間、当寺に住し、大曼荼羅灌頂道場を建立し、また密教経典を漢訳した。845 年（会昌 5 年）の、武宗による会昌の廃仏の時には、大慈恩寺・西明寺・大荘厳寺と共に廃寺を免れた

（小雁塔）（しょうがんとう）とは、中国唐代に長安城内の大薦福寺境内に、景龍中（707 年 - 710 年）に建立された磚塔である　長安城の城坊では、左街の安仁坊（旧・安民坊、太宗の名の「民」字を避諱。）の西北隅に当たる、薦福寺の子院（塔頭）である浮図院に建てられた。高さは、現状で 13 層 43m であるが、当初は 15 層 88m あったとされる。地震などによって崩壊し、現在の姿になっている。大薦福寺の伽藍は変則的に配置されており、小雁塔は安仁坊にあるが、大薦福寺は、北隣の開化坊に在った。一名を華厳塔とも言う。宋代以降、しばしば地震等で被災しており、数次の重修を経て今日の姿となっている。その中でも著名なのは、明の嘉靖 34 年（1555 年）に記された塔下層に残る題記に見える、地震の被害と復旧にまつわる逸話である。それによれば、地震によって塔が二つに裂けたが、再度の地震によって元の姿に戻った、という。成化末年（1487 年）に起こった地震で、塔に反対側が見える程の亀裂が走ったが、正徳末年（1521 年）の地震により、ひと晩で塔が復旧した、と記されている。**日本の留学僧慈覚大師円仁がかつて逗留していた薦福寺（小雁塔）には、寺はない13階の塔のみ上がって見たが塔内には何もない。小雁塔と言われるが塔の大きさは大雁塔と同じである。無住職で公園になっている。**

大薦福寺山門

参道

左右に鐘楼、鼓楼

小雁塔

狭い急な階段

最上階崩れているので鉄柵がある

崩れた所

中国古代佛塔説明図

小雁塔の最上階より西安市街

臥龍寺（がりょうじ） 西安市柏樹林街臥龍巷にある。1800 年以上の歴史を持つ寺で、国務院によって全国仏教重点寺院に指定されている。

寺の面積は 15 ムー、中院、東院、西院で構成され、中院には金剛殿、斎堂殿、方丈殿、大王殿、祖師殿、菩薩殿、大雄殿がある。

臥龍寺は漢の霊帝時代に創建され、隋代には福応禅院と呼ばれた。宋代に高僧惟果が横になって禅を念じていたことから臥龍寺という名前が付いた。

寺には元、明、清の石碑が林立していて、当時の文化を知る上で重要な価値がある。

1900 年、八カ国連合軍が北京を攻撃したときに西安に避難してきた西太后と光緒帝が臥龍寺に銀千両を贈って石碑坊などを建立した。**（17時半）寺が終ったが無理に開けてもらった。**

中国ではこじんまりとした寺

立派な本堂に山号額

本堂には千手観音

法堂立派な山号額

法堂内には目も覚めるような白玉仏

境内は余り広くない